

札幌大学総合研究 第4号（2013年3月）

〈論文〉

通訳者の社会的認知・理解促進と取り組み

熊谷ユリヤ

〈要旨〉

本稿では、通訳者という仕事が高度な専門職と認識されている国々・地域と異なる、日本国内・地方での現状や、改善するための通訳者の取り組みを提示した。また、学会や研究会を中心とした理論面からの取り組みの他に、通訳者の待遇改善地、元通訳者の結束やウェルビーイング向上を目的として一地方の通訳者たちが立ち上がった事例も紹介し、日本における通訳者全般の社会的地位向上に、通訳者たち自身がどのような形で貢献しているのかをも考察した。

【キーワード】

通訳者 社会的認知・理解 専門職 地位向上

I. はじめに

通訳者は、語学学習者にとって憧れの職業のひとつであり、グローバル化が進む現在の日本にとって不可欠かつ重要な専門職でありながら、通訳の現場での扱われ方、社会全体の理解・認識、社会的地位と待遇という面では、必ずしも恵まれているとは言えない。

本稿では、通訳者という仕事が高度な専門職と認識されている国々・地域と異なる、日本国内・地方での現状や、改善するための通訳者の取り組み提示したい。また、学会や研究会を中心とした理論面からの取り組みや、通訳者の待遇改善、また、学会や研究会を中心としたウェルビーイング向上を目的として一地方の通訳者たちが立ち上がった北海道通訳者協会の事例も具体的に紹介し、日本における通訳者全般の社会的地位向上に、通訳者たち自身がどのような形で貢献できるのかをも考察する。

II. 日本通訳翻訳学会

「通訳の理論と実践および教育に関する科学的・多面的研究を促進するとともに、この分野の社会的理解の増進に寄与すること」を目的に、「日本通学会(JAIS)」が創立されたの

は、2000年のことである。2002年には、通訳・翻訳研究の分野では日本で唯一最大の日本学術会議協力学術研究団体「日本通訳翻訳学会(JAITS)」となり、会員数は、筆者を含めて約350を超えているという(2012年1月現在)。

JAISの創刊号で当時の会長で、JAISの母体となった「通訳理論研究会」の創設者の一人であった近藤正臣氏は、通訳者を取り巻く当時の状況について次のように記している。

この専門職の作業の内容にたいする社会一般の理解となると、これもおぼつかないものがあります。近年の状況はたとえば20年前とはたしかに変わってきているでしょう。通訳職の必要性も認識され、文部省も大学院における通訳者の訓練には積極的だと伝えられています。しかしそれでも、ことばができれば通訳なんてできるという誤解はまだまだなくなっていないどころか、かえって広まっているかもしれません。通訳という職業は大学生の間では大人気ですが、単なる流行かもしれません。

それから12年を経た現在、会員たちの調査・研究・執筆・出版活動、学会や研究会での発表、および教育活動などの努力により理解は少しずつ促進されつつあるが、社会一般の認知・理解、その結果としての通訳者の社会的立場に関しては、通訳者という仕事が高度な専門職と認識されている、いわゆる通訳先進国・地域に比べれば問題が多いのが現状である。

II-2. 「通訳さん」と「翻訳家」

2000年9月に開催された「日本通訳学会」の設立大会での記念講演の演者は、アポロ11号月着陸で同時通訳者という存在を日本中に知らしめることになった、同時通訳の草分けであり、通訳の名人として尊敬を集める西山千氏であった。「二か国語の間(はざま)で」と題した講演の中で、通訳「者」の呼称に関して、次のような言及をし、参加した通訳者・通訳研究者たちに呼びかけたのが印象的・象徴的であった：

ひとつ皆さんに是非一般社会に普及してほしいことがあります。日本語で「なにかを行う人」には、たとえば「翻訳家」や「運転手」などと、ちゃんともうひとつ名詞がついています。ところが「通訳」は動詞にも名詞にも使われます。「おい、通訳を呼んでこい」と言われます。いまだにテレビなどでも「通訳をつけて」などと言っています。あれはけしからんと思います。日本語を知らない、と大声で言いたいんです。なぜかといいます

と、医者に行くとき「医」に診てもらいに行くとは言わないでしょう？ 運転手に道を教えるときに「運転」に道を教えるとは言わないでしょう？ 運転「手」と、ちゃんと名詞がつくわけですよ。通訳をする人を「通訳」という動詞で呼び捨てにするのは、はなはだけしからんと思う。通訳する人を「通訳者」と言うことは、私は非常に大切であると思います。そのことを皆さんにおおいに普及してもらいたい。

同氏の持論であるこの意見を以前にも聞いた教え子や後輩たちの耳にも、当然、単なる呼称の問題としてではなく、この学会の設立趣旨を踏まえた、日本における通訳者の社会的認知・地位の更なる向上を後進たちに託した強いメッセージとして伝わったはずである。2007年に95歳で逝去された恩師との再会はこれが最後となった筆者にとっても、遺言として、しっかりと胸に刻まれている言葉である。

II-3. 声の文化と文字の文化

この時の西山氏の肩書は、「日本翻訳家協会理事長・同時通訳者」であった。通訳をする人は一般社会では「通訳さん」と呼ばれるが、(せめて)「者」をつけるように、ところが、翻訳をする人は翻訳「家」でと呼ばれるという点に注目したい。呼称の違いを考える上で、同じ言葉を扱う専門職の間でも、ウォルター・オングの提唱する「文字の文化(リテラシー)」を「声の文化(オラルティ)」を思うとき、前者を高位に位置付ける日本文化の中では、更に重みが異なり、通訳者の概念的な社会地位は低くなることに、改めて気付くのである。

翻訳は時間差があり、辞書検索や推敲・校正も可能だが、通訳は蓄積された知識と語学力と、状況を頼りに瞬時の判断で訳す。「通訳と翻訳は類似した行為であり、前者が口頭であるのに対して後者がテキストを扱うのみの違いにすぎない」との誤解が依然として一般にある。しかし、実際は、通訳には即時性が要求され、表現を言い直したり専門用語を辞書で確認したりなど、許されない。更に、異言語・異文化間交渉・交流・情報交換の現場に参加することで、対人コミュニケーション能力も要求される。聴き取りをした英国、フランスの通訳者によれば、雄弁が美德とされるギリシア文化が根底にあるヨーロッパでは、通訳に関して日本のような意味での翻訳の下位としての作業という差別は無いという。一方、正確性を重んじるアメリカ人が、瞬時に訳出する通訳よりも精度で優れる翻訳者を上に扱っていたという西山氏の体験談も印象深い。

III.地方の取り組み 北海道通訳協会

2000年に筆者が行った通訳者に対する調査をまとめた「通訳者という存在：「望まれる通訳者像」から「望ましい通訳者像」へ」の冒頭に下記のような記述がある：

グローバル化が進み様々な分野において異言語・異文化交流・交渉の場が増えている現在、日本国内でも通訳者を通じたコミュニケーションの機会が増加している。しかし、通訳を依頼、あるいは通訳者を雇用するクライアント範囲が広がるのに比例して、通訳に対する誤解や通訳者の効率的な活用法、更に通訳者という存在に対する認識不足により円滑な交流・交渉が妨げられるケースが増えていると感じている通訳者が多いのも現実である。

この調査の時期からさかのぼる1998年、北海道では、会員のwell-being（個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念）の向上を図ることを目的に、国際コミュニケーターとしての資質向上に努めようという意志をもった北海道在住の通訳者・翻訳者により「北海道通訳者協会(HICOM)」が設立された。HICOMの設立の背景には、国際化の進展に伴い、北海道では国際会議や国際交流事業、海外協力事業、姉妹提携に基づく相互訪問などが年々増加の一途をたどっている現状があった。また、産業界における対外経済活動や交流事業も活発化している状況下において、国際間の真の相互理解をサポートする有能な通訳者／翻訳者がますます必要となっており、地方に於ける需要も増しつつあることが挙げられた。

その一方、北海道における通訳者／翻訳者の数は比較的少なく、また、クライアント（各団体、企業等）の通訳／翻訳業務に対する理解度は必ずしも高いとは言えない現状にあった。このようなことから、数名の会議通訳者が中心となって、通訳／翻訳など国際的コミュニケーションに携わる方々に参加を呼びかけた。この協会の目的は、会員相互のネットワークを築き、交流と親睦を深めるとともに、通訳／翻訳等の技術向上を図るために、研修や情報交換を行うことにある。さらには、クライアント向けの通訳／翻訳業務に関する情報の提供や、待遇改善のはたらきかけを行い、会員に業務遂行への支援を提供することでもある。

IV. HICOM通訳者利用マニュアル

HICOMは2014年で節目の年を迎えるが、設立当時から比べて、北海道内の通訳者のウェルビーイングは、大きく向上した。当時、一日の同時通訳でも2人体制、資料もそろわず、問題点が多かったことに鑑み、HICOMでは、通訳者利用マニュアルを作成し、クライアント周知する一方、エージェントにも交渉を行った。

『通訳者を効果的に利用するために』と題されたマニュアルは、「はじめて通訳者を利用する場合は参考にいただければ幸いです。」にはじまり、手配や料金の考え方を説明している。その要点と背景は次の通りである。

手配

まず、通訳者の手配はイベント等の開催が確定した段階で予約を入れておくことを薦めた。同時通訳者なら6ヵ月前でも決して早すぎではないこと、逐次通訳の場合でも大切な会議なら3ヵ月前から手配されていること。後は各々の通訳者やエージェントのキャンセルに関する決まりを良く理解しておくとな不必要な出費をふせぐことができること。

また、キャンセル料金、時給制、超過料金、ダンピングなどの問題に対処するため、料金の目安を提示したことにより、会員がクライアントやエージェントに通訳料を提示するよりどころができた。特に、それまでクライアントやエージェントの言い値で受けざるを得ない状況であった、経験の浅い通訳者の待遇向上につながった。

1.料金

通訳者の料金は、通訳者を全体で何時間拘束するかで決まる。例えば、午後のセミナーに通訳者が必要となる場合、そのセミナー自体の長さが3時間であったとしても、セミナーには打ち合わせが必要になる。セミナーの直前に打ち合わせをセットでき、拘束時間が4時間以内におさまる場合は最低の半日料金のみとなる。(注：エージェントによっては3時間以内を半日とするところがある)

打ち合わせが主催者、演者の都合で午前中に予定される場合は、通訳者はその日一日拘束されるため、全日料金（8時間以内）の請求となるため、予算がない場合は日程の組み方を考慮することを勧めた。

クライアントから直接仕事を受ける場合、通訳者は1時間単位では派遣されるわけではなく、半日か全日という契約になる。従って、たとえ仕事が1時間以内で終るものであったとしてもその通訳者の半日料金分が請求されることは、理解が得られなかったケースもあったため、その点も明記した。

また、「通訳者には資料が必要である」という通訳者の常識が実行されいないことも多かったため、周知するためには次のような内容を提示した。

2.資料

通訳者は仕事／会議の内容を熟知している必要があること。今までの海外の企業とのやりとり（通信文、関係資料）等を参考資料として、事前に通訳者に渡しておくことと当日の会議はよりスムーズに運ぶこと。勿論当日、会議（セミナーの場合は会場の参加者に配られるものを含む）で使用する資料も通訳者の手元になければならないこと。

会議参加者の名簿は日英で必要となること。これは参加する方々の団体名、役職の英訳をかってに通訳者がつくるべきではないからである。主催者側で事前に調べておいてくだされば大変助かること。（着席スタイルの夕食会等にも必要）

セミナーや講演会等沢山の情報を短時間で提供する場合は、主催者側の責任で講演の原稿を依頼しておくことがセミナーを成功させる上で不可欠な条件となること。原稿を用意しない演者の方に関しては、十分な打ち合わせの時間が必要となること。

原稿がない場合でも、資料（OHP、スライド）をもってくる人が多いので当日使用するものの確認をとり、数日の余裕をもって依頼し、あるいは間に合わない場合も、通訳者に流すべきものであること。

なぜなら通訳者はあくまでも言語と通訳の専門家であり、業務や会議の分野によっては専門用語を事前に学習しなければならないからである。資料が日英で用意されているものがあれば通訳者側の準備時間も短縮される。必ずしも対訳のものでなくてもよいが、外国人の通訳をする場合、日本語の参考資料があるとその業界用語を適切につかった正確な通訳が期待できる。

通訳には事前の打ち合わせが不可欠であるが、それも徹底されていなかった上に、打ち合わせ時間が料金に含まれないということも多かったため、打ち合わせの重要性を訴える

ものである。

3.打ち合わせ

シンポジウムやセミナー等の通訳には打ち合わせが必要というのはイベント全体の関係者との打ち合わせというより、演者と通訳者との打ち合わせを意味する。当日使用する原稿の中にでてくる表現の意味の確認、固有名詞、重要な数字、原稿の変更箇所の打ち合わせとなる。特に演者がネイティブスピーカーではない場合、その方の話す英語に慣れるという通訳者にとっては貴重な時間でもある。

4.業務内容

日本通訳学会の項目で述べた「専門職」としての通訳を理解してもらうために業務内容を明記し、翻訳や掃除や事務は通訳業務の一環ではないことも徹底した。更に、人数の体制や勤務内の待遇について、特に女性が多い通訳者に配慮する条項も加えた。また、通訳者の集中力についても具体例をしめした。

通訳は専門職であり、言葉の橋渡し役をつとめるエキスパートである。よく誤解されるのが、外国語を訳すという意味において、翻訳もついでに依頼されることあるが、翻訳はまったく別の業務であり、税金の問題もあることから、通訳者として派遣されている時は、紙に訳を書く作業は含まれないこと。

通訳者は女性が多いため、専門職とは見なされず、専門以外の業務を強いられることが時々ある。朝一番で集合場所に行くと、雑巾をもたされ、事務所の掃除をさせられた例も少なくなかったため、通訳業務以外の仕事は引き受けかねることも明記した。

通訳には逐次と同時通訳があり、逐次は演者がいくらか話した後、演者は話すのを止め、その間に通訳者が訳を伝えるのがそれに当たる。同時は演者の方が間を空けずに話すことができるようにするやりかたである。聴衆側はイヤフォンをつけて訳を聞くことができるが、通訳は集中力を要するため二人一組で行ううえ、ブース設営や具疎巢の手配も必要となること。

時間が限られている場合、ウィスパリングで通訳をすることも可能であること。外国人の人数が少ない場合（2名程度）、日本人の発言を外国人の側でささやくスタイルの通訳

であるが、簡易同時通訳機を使用することで、多人数にも対応できること。（HICOMではこのための機器を購入し、会員に貸し出しを行っている）。ウィスパリングは基本的には同時通訳であり、複数の通訳者が交替で通訳する必要があるため、数時間の会議を一人の通訳者にウィスパリングさせるのは、暗算を連続で何時間もさせることに似ており、集中力には限界があることも説明した。以下はその要約である。

会議を一日おこなう場合、体制としては、逐次では2名、同時では3－4名の通訳者が必要ある。また、又半日の講演会においても演者が複数いる場合は通訳者の追加も必要になってきます。3時間のセミナーを一人の通訳者が担当する際は、通訳者の休憩の時間をいれなければならない。休憩を入れることが不可能な場合は、通訳を必要としない演者やビデオを途中で入れるなり、プログラムを調整することで問題が解決される可能性もある。ブース内でおこなう同時通訳は通常15分～20分交替でおこなわれる。

5.同時通訳設備

HICOM発足当時当時建設された公共の建物に設置された同通ブースが、設計者の知識不足からステージが見えない設計になっていたことから、次のような機器や施設の説明も行った。

同時通訳用のブースが最近道内でも整備されるようになってきているが、問題は通訳者の作業を考えずに設計されているものが中にある点にある。ブースの数が多くても、中に入ってみると一人しかはいるスペースがなかったり、ヘッドフォンがひとつしか用意されていなかったり、同時通訳者はペアで仕事をするという認識がブースを設置したメーカ側にも欠けているケースも見られる。今一度機械に2つのヘッドフォンが接続されていることと2人の通訳者がすわって作業できる環境になっているかデスクライトの準備についても注意を加えた。

更に又演者の顔や、OHPやスライド等を映しだすスクリーンがブースの窓から見えない場合は、大変作業がしづらく、ブースの設置の仕方を見直していただきたいところがあることも事実であることなど、通訳のパフォーマンスを高めるために必要な環境を求めた。

V.通訳料金 と社会的地位

西欧では、多民族・多言語の歴史、移民が多いため、パブリックサービスは、日本のようなボランティアだのみではなく、公的機関が雇用する通訳者によって提供されている。また、ヨーロッパでは会議通訳が主流である歴史的経緯などもあいまって、通訳理論研究の歴史が長く、大学院レベルでの教育をうけた高度な専門職であるという認識により、社会的地位が日本より確立されている。

通訳が非常に創造的な作業という理解が浸透していない。日本では、例えばクレジットカードを申し込んでも定収が無いから駄目であるとか、ローンを申し込んでも受け入れられないという扱いがあった。「通訳料金の安定=地位の向上」という公式は必ずしも成り立たないが、HICOMでは、それまでの地方料金に比較して高額と思われる全国レベルの次のような基準料金を設定した。

I. 通訳料の基準（単位 円）

1.一般通訳（商談，視察，パーティ等）

- ・ 一日: 45,000 半日: 35,000 超過料金（1時間につき）：7,000
- ・ 観光ガイド通訳 一日: 35,000 半日: 20,000 超過料金（1時間につき）：5,000

2.会議通訳（専門的な会議，セミナー，講演等）

- ・ 一日: 70,000 半日: 45,000 超過料金（1時間につき）：12,000

3.同時通訳 A クラス一日: 100,000 半日: 67,000 超過料金（1時間につき）：16,000

B クラス 一日: 72,000 半日: 48,000 超過料金（1時間につき）：12,000

これにより、過去には、クライアントやエージェントの言い値や条件で業務を受けていた会員の中には、「HICOMの基準ではこのようになっています」という主張が出来るようになった人もいる。

VI.HICOM研究談話委員会

HICOMは、会員全員が何等かの委員会に所属し、会長と代表の下に、委員長会議と総会が合議制で運営を行っている。たとえば、委員長が観光委員会ではアテンド通訳や通訳案内士の業務に関心がある会員が技術向上の勉強会を行い、ボキャブラリー委員会では、学問ジャンルごとの通訳翻訳用語集が作成され、会員に公開されている。

筆者が委員長を務める研究談話委員会は、通訳研究談話会を開催し、ボランティアとの共生、役割り分担、各国事情比較などを行い、地位向上理解促進に貢献する道を模索している。また、同委員会の主催で、一般市民やクライアント対象の公開シンポジウムも開催し、更に会員による問題提起、パネルディスカッション、一般参加者を交えた全体討論を行い、社会的認知の促進と会員拡大を図りつつウエルビーイング向上に貢献している。

VII.将来の展望

HICOMのような地方の通訳者が自主的に立ち上げたウエルビーイングの組織がどのくらい存在するはインターネット検索からは見つかっていないが、今後は、他地域の類似団体があれば、連携を図っていききたい。会議通訳者や研究者が中心となって理論研究の側面から全国的な学会が通訳者の社会的認知に尽力することは異なる切り口、という側面から活動を進めていくことは有意義であると考ええる。

今後の筆者の研究としては、通訳者の社会的地位の考察を、いわゆる通訳先進国の例を歴史的視点と対比させる、あるいは、「ボランティアという無償の行為が美しい行為である」と考える日本文化」に業務を浸食されている非会議通訳者の会員と、「高度な専門職の誇りがあれば無償では働かないし、ボランティアとの共生は不可能である」というHICOMの外国人会員の考え方の違い等の背景を検証する一方、会議通訳者のHICOM会員に多大な経済的打撃を与えている入札制度の拡大問題等も交えて研究をつづけ、表面上の一見華やかなイメージとは裏腹に、多くの通訳者が直面してきた現実とのギャップを特定し、更なる通訳者地位向上、理解促進に貢献していきたい。

<参考文献>

- イカロス・ムック(2012)『通訳翻訳ジャーナル 2013年 1月号』[季刊](イカロス出版)
イカロス・ムック(2012)『通訳者・翻訳者になる本 2031』(イカロス出版)
熊谷ユリヤ(2000)「通訳者という存在：「望まれる通訳者像」から「望ましい通訳者像」へ」(札幌大学総合論集第10号)セレスコヴィッチ・ダニツア(2009)ベルジュ伊藤訳『会議通訳者』(研究社)
柘原 誠子(2001)『通訳の現場から』(朝日出版社)
遠山 豊子(2001)『入門ー通訳を仕事にしたい人の本』(中経出版)
友野百枝 他(2012)『通訳学101 ～理論から実践まで～』(大阪教育図書)

- 鳥飼 玖美子(2007)『通訳者と戦後日米外交』(みすず書房)
- 原 不二子(1994)『通訳という仕事』(ジャパントイムス)
- 西山千 (2000)「日本通訳学会第1 回大会 記念講演 二カ国語の間 (はざま)」(通訳翻訳研究創刊号 日本通訳学会)
- ピンカートン・曄子(2001)「オーストラリアと日本の通訳に関する問題」,『通訳理論研究1』,(日本通訳学会)
- 水野真木子(2001)『通訳のジレンマ 通訳になりたい人と通訳を雇いたい人のためのコミュニケーション論』(日本図書刊行会)
- 水野 真木子「海外調査報告:ニュージーランドの通訳事情」『通訳研究6』(日本通訳学会)
- BAKER, Mona Ed.(2008) Routledge Encyclopedia of Translation Studies, Routledge, London, New York
- 西山千・松本道弘『同時通訳おもしろ話』(2004, 講談社)
- ジャパントイムズ『通訳・翻訳キャリアガイド2013』(2012, ジャパントイムズ)

<参考ウェブ文献>

- AIIC(国際会議通訳者連盟 (AIIC) <http://aiic.net/>
- EU MAG (駐日欧州連合代表部の公式ウェブマガジン)<http://eumag.jp/>
- EU in Japan 駐日欧州連合代表部 <http://www.euin-japan.jp/>
- HICOM(Hokkaido International Communicators Association) <http://www.hi-com.org/>
- ICU Alumni Association Web Site <http://www.icualumni.com/interview/guest34.html>
- JAITS 日本通訳翻訳学会 [http://a-mizuno.blog.so-net.ne.jp/\(最新情報\)](http://a-mizuno.blog.so-net.ne.jp/(最新情報)) [http://jaits.jpn.org/home/\(アーカイブ\)](http://jaits.jpn.org/home/(アーカイブ))
- NAATI (The National Accreditation Authority for Translators and Interpreters Ltd) <http://www.naati.com.au/> NZSTI(New Zealand Society of Translators and Interpreters): <http://www.nzsti.org/>